

批評家としての W. D. Howells の 一つの変化

—*Criticism and Fiction* と “Novel-Writing and Novel-Reading” —

岩 山 太 次 郎

I

W. D. Howells (1837-1920) の批評論の真髓は、一言で言えば、芸術は人生の真実を描くもので、この真実は “the simple, the natural, and the honest”¹ なるものを判断の規準においてみるべきだというリアリズム論である。一般には、彼のリアリズム論は *A Modern Instance* が発表された1882年頃までには確立されていたとされている。しかし、そのリアリズム論は、彼の60年間にもおよぶ創作・批評活動の期間²には、かなり変化がみられる。そして、もっとも精力的に批評論を書いた1880年代および90年代³においてすら、変化があった。

本稿は、批評家としての Howells のリアリズム論の根幹をなす「真実」(“truth”) を形成するものがなにであるか、そして、「真実」がなぜ「美しいもの」(“beautiful”) と「良きもの」(“good”) になるか、という点での変化を、1880年代の代表的な見解として *Criticism and Fiction* (1891) と、1890年をしめくくるものとして、1899年の講演旅行に用意した2つの原稿のうちの1つである “Novel-Writing and Novel-Reading: An Impersonal Explanation”⁴ とを比較して、検討しようとするものである。

II

Criticism and Fiction の最初の数頁で、Howells は、小説は「美しく、良いもの」(“beautiful and good”) (p. 10) についての小説家の観念を反映したものであると規定している。しかし、小説家の「美しく、良いもの」という観念は、一般の人の好みとは必ずしも合致しないことを認め、Howells は永続性のある規範を Edmund Burke の *A Philosophical Enquiry into the Nature of the Sublime and the Beautiful* (1757) と J. A. Symonds の *Renaissance in Italy: The Catholic Reaction* (1886) に求めている。Symonds を援用して、“what is unpretentious and what is true is always beautiful and good, and nothing else is so.” (pp. 9-10) と、小説における「真実」が「美」、「良きもの」に通じるという考えは古くからあるもので、決して独創的なものでないことを明らかにしている。⁵

Howells はこういう「真実」を求める文学をリアリズムの文学と呼んだのであるが、それは“nothing more and nothing less than the truthful treatment of material” (p. 38)⁶ にほかならないという。そして、Howells のこの主張の主眼は技巧についてなされたのではなく、素材にたいする作家の忠実さにおかれていた。素材にたいする忠実さが真理の探求に結びつき、どんな素材でも意味のある探求の対象になる、と Howells は考えた：

In life he [the realist] finds nothing insignificant; all tells for destiny and character. . . . He cannot look upon human life and declare this thing or that thing unworthy of notice, any more than the scientist can declare a fact of the material world beneath the dignity of his inquiry. (p. 15)

Howells は Armando Palacio Valdés の主張を借りて、現代の小説家はあらゆることがらを偏見なしに知ろうとする態度をもっているが、これ

は “all is equally grand, all is equally just; all is equally beautiful” (p. 33) という考えにもとづいたものであるという。さらに, Howells は Valdés につけ加えて, “... beauty... exists in the human spirit, and is the beautiful effect which it receives from the true meaning of things; it does not matter what the things are, and it is the function of the artist who feels this effect to impart it to others.” (pp. 33-34) という。さらに, 次のように Valdés から引用している:

“He [the artist] who sets deliberately about modifying nature, shows that he has not felt her beauty and therefore cannot make others feel it. The puerile desire which some artists without genius manifest to go about selecting in nature, not what seems to them beautiful, but what they think will seem beautiful to others, and rejecting what may displease them, ordinarily produces cold and insipid works.” (p. 34)

小説家が「美しい」ものとはいかなるものかを決定するのは, 他人が「美しい」と思えるものを自然の中から選択しなければならないという Valdés の主張を借りている。

このように Howells は, 真実なものは「美しい」という仮説を小説は反映したものであるとする。小説家は科学者と同じように真理を求めるものであるが, 今日の世界は一小説家がとらえられないほど広大なものであり, また多様なものを含んでいるから, 小説で扱う内容は自分のもっとも熟知している世界のものに限定し, しかも「新鮮さ」と「興味」(p. 68) にみちた状況を描くべきである, と考えた。

そして, 小説家はその世界に任んでいる人間についての真実を描くようにつとめるだけでなく, 描く社会についての真実と社会が個々の人間におよぼすインパクトを観察し, 解釈して描くべきである, と Howells は考える。この「観察」と「解釈」が小説の素材にたいする最初の二つの条件であった。

小説の素材の選択にあたっての第三のステップとして、Howells が不可欠なものと考えたのが「道徳的判断」である。この「道徳的判断」とは、「人間の経験」の意義についての評価であり、小説家が客観的に観察し、解釈した素材にたいする小説家自身の道徳上の信念にもとづいたものでなければならない。この第三段階をへることによってはじめて、小説に「美しいもの」と「良いもの」が生れる、と Howells は考えている。(p. 10) このように、小説がたんに「美しいもの」だけを表現するものではなく、「美しく、良いもの」を描くものであるとした場合でも、小説の目的は人間の行為、感情を忠実に再現することを通して実現されるべきなのである。それはまた、自然に忠実であることによって、「美しい」作品を創造することでもある。そして、この創造された「美しいもの」の最高の効果として、道徳的、倫理的なものが生れる、と Howells は考える：“... the finest effect of the ‘beautiful’ will be ethical and not aesthetic merely.” (p. 42) これが Howells の言う小説における道徳性であり、この道徳性がなければ、いかなる小説も「魂」がないものとなる、と考える：“Morality penetrates all things, it is the soul of all things.” (p. 42)

さらに Howells は論を進めて、一見「美しい」ものには誤った道徳性を帯びることもあるが、そのような場合、「美」は低次元なものとなると言う。「美」の品位が高まるのは「美しいもの」が「真の道徳性」(“a true morality”)を持っている場合だけであると言う。小説家は読者が小説の中にもられた道徳的な意味に影響されやすいものであることをよくわきまえていて、小説に真の道徳性をおびさせるように常に注意を払わなければならない：“The greater his [the novelist’s] power, the greater his responsibility before the human conscience, which is God in us.” (p. 43)

では「真の道徳性」はいかにして生れるかという、Howells の考えでは、小説の素材とその取扱ひ方の両面において、人間性にいつわらないものを表現することにより生れるものである。そして、小説家は表現する人

物の行為が正しいものか、そうでないかを示さなければならないと考える。小説家の義務は “to distinguish so clearly that no reader of his may be misled between what is right and what is wrong, what is noble and what is base, what is health and what is perdition, in the actions and the characters he portrays” (p. 48) であると言う。それは、小説は読者を楽しませるだけのものではなく、人間をより善に向かわしめ、よりおもしろいものにする (“to make the race better and kinder”) (p. 87) ものであると考えているからである。

しかし、ここで注意しなければならないことは、道徳性と芸術性の関係である。リアリストとしての小説家は、人生から素材を知的に選択し、解釈し、そして、それを描く際に道徳性をもたせるものであるが、小説家の道徳的な意図は芸術を左右するものであってはならない、と Howells は考えた。この点に関して Howells は George Eliot と Jane Austen を引きあいに出す。Howells の考えでは、George Eliot は Jane Austen よりも、道徳的意図においては勝っているが、芸術のもっとも本質的なものである形式と方法に関しては、George Eliot は素材の扱い方では真実でなく、現実らしさ (“illusion of actuality”) を描き出す点では、換言すれば自然らしさ (“naturalness”) を出す点では、Jane Austen に数等おとっていると判断している。(p. 39)

上述してきたように、*Criticism and Fiction* で展開されている小説で描かれる人生の真実は「美しく」て「良いもの」でなければならないという主張のなかには、素材の選択にあたっての観察と解釈、および道徳的意図の問題が含まれているのである。そしてそれは、Howells が繰り返して主張した “Realism is nothing more and nothing less than the truthful treatment of material.” というリアリズム論のなかでも根幹をなすものである。

III

ところが、“Novel-Writing and Novel-Reading: An Impersonal Explanation”では、小説のもつ道徳的効果がそれ以前にまして強調されるようになる。この講演の原稿は、表題にも示されているように、書く側と読む側とから小説を考察しているのであるが、全体としては、小説を小説家の立場から論じている。

Howells はなぜ小説を読むかということから論をはじめ。一般読者が小説を読むのは、楽しみ (“pleasure”) のためであるが、小説家が自分や他の小説家の小説を読む場合には、一般読者以上に、どのようにして美が表現されているかという技巧に関心を払うと言う。そして、美というのは、*Criticism and Fiction* でいっているのと同じように、真実のことである。“By beauty of course I mean truth, for the one involves the other. . . .” (p. 8) Howells にとっては、醜悪なものは虚偽であるが、真実はたとえ見苦しいものであっても、悪ではないし、不正になることも墮落したものになることもない。

いかにして「真実」を小説にもり込むか、いかにして「美」を創造するかは、小説がどれだけ実人生のようであるかにかかっている。Howells にとっては、実人生が描かれていない小説は、芸術作品とはいいいがたいもので、醜悪なものなのである。小説には真実を求めるたえざる努力が払われていなければならないし、そういう努力が払われている小説に「美」を感知する、という⁷。小説家の方も、劇的な状況を設定したり、絵画的にしたりして、人生をすばらしいものに再現するのではなく、たとえそれが劇的にも絵画的にもならなくても、あらゆるものを対象として受入れるべきである。そして、現実の「人生の効果」を出すように努めるべきなのである。そうすれば、そこに「真実の美」(p. 21) が生れる、と Howells は考えた。小説家が可能なかぎり現実の人生らしく人生を描くためには、不純な動機

でも、説明のつかない複雑な会話のとぎれでも、恐ろしくたいくつな日々でも、崇高な目的と劣悪な目的の間のどんな葛藤でも、善も悪も、描く対象になり、このようなものがもりこまれてはじめて、「真実の美」が生れるのである。

では、「真実の美」を生む「真実」とはなにかについては、*Fiction and Criticism* で述べられているのと同じように、「真実」とは人間の経験にたいしての真実であり、そういう真実が美になりうる唯一のものなのである。人間の経験は多岐多様であるから、きまった構成があるわけではなくて、経験にもとづいて働く想像力が、人生にもっとも密接で、しかももっとも厳しい研究から生れた正確さを生むのである。Howells の考えでは、こういう信条がリアリストの信条であり、それに反するとロマンチストの信条と同じものになってしまう。したがって、Howells にとっては、小説家はなにかを創造すること（“to create”）が要求されているのではなくて、組立てること（“to compose”）が要求されているわけである。

生活をありのままに組立て、われわれが日常、目にし、一番よく知っている人間を扱い、それらの人物から生れてくる出来事を記録する小説が最高の形式のもの、と Howells は考えた。したがって、アメリカの小説家の場合は、アメリカ人の目でアメリカ人の生活を描くことが真実を描くことになるわけである。

そして、真実を組立てる形式として、自伝的形式、伝記的形式、および歴史的的形式があると Howells は考えた。小説家があらゆる出来事を現実の出来事のように語り、状況を完全に支配できるのは、自分自身のことを語る場合であるから、Howells は自伝的形式がもっとも完全な小説形式であると見た。

以上のような組立て方と形式のなかで生れた真実性は「道徳的効果」（“moral effect”）をおびるものである、というのが Howells の主張である。ロマンスはありのままの現実よりも理想にもとづいたタイプを扱う意

図をもっているものであるから、Hawthorne の小説にみられるようにアレゴリカルになる。またロマンチスティックな小説は、実際の生活を描こうとはしているが、描写過剰であるため、Dickens や Hugo にみられるように、真実を求めるよりは、むしろ効果を求めているため、自然にたいてい偽りとなってしまう。そのため、ロマンチストは完全にモラリストになるか、センチメンタリストになるか、カリカチュリストになるのである。リアリストは、読者の好みに迎合することなく、自分の選択した素材で、可能なかぎりの人生の真実な絵を組立てようとする。そうすることによってはじめて、リアリストは芸術家という名に値する小説家になれるのである。小説家は読者を喜ばそうとか、ましてや読者を教えることを目的としてはならない：

He [the author] had better not aim to please, and he had still better not aim to instruct; the pleasure and instruction will follow from such measure of truth as the author has in him to such measure of truth as the reader has in him. (p. 14)

小説の芸術性は議論や道徳規範の展開によるのではなく、真実な物語によって読者を魅了すること、読者のなかに生れる経験によるのである。

...it [the novel] shall be a mission to their [men's] higher selves only so far as it shall charm their minds and win their hearts. It shall do no good directly. It shall not be the bread, but the grain of wheat which must sprout and grow in the reader's soul and be harvested in his experience, and in the mills of the gods ground slowly perhaps many years before it shall duly nourish him. (p. 14)

もし小説が人生を真実に描くことに成功すれば、喜びとか、効用とか、英知といったよい効果が生れてくるが、これに成功しなければ、小説からはどんな「良いもの」(“good”) も生れない、と Howells は言う。

Howells にとっては、小説で描かれる人生の真実とは、小説家が人生そ

のものについて知っていることをとりあげ、それを人生そのもののように模倣したものである。知っているものと模倣されたものの間にはつなぎ目があるが、小説家はそれを巧みにかくさなければならない：

We start in our novels with something we have known of life, that is, with life itself; and then we go on and imitate what we have known of life. If we were very skilful and very patient we can *hide the joint*. But the joint is always there; and on one side of it are real ground and real grass, and on the other are the painted images of ground and grass. (p. 15)

このつなぎ目の役割をはたすものが想像力である、と Howells は考える。想像力により巧みにつなぎ合わされた模倣された人生から「知的刺激」(“intellectual stimulus”) (p. 20) または「道徳的影響」(“moral influence”) が生れる⁸。近代の小説は、人間の魂の暗い面、上流、下流をとわず社会にあるごみごみしたきたない面に光をあてて、われわれに人間とはなにであるか、われわれが生きている世界はどんなところであるかを知らせることによって、この「道徳的影響」を十分に生まなければならない、と Howells は言う。かつては、説教がこういう役割をはたしていたが、今日では説教はこの目的を遂行できないため、小説がそれにとって代わるべきである、と考えた。

したがって小説家の任務は、現実世界のさまざまなことがらに正しい関係と釣合をもたせるよう組合せて、現実世界を忠実に描いて、その展望を与えることによって、読者に「真実」がなにであるかを理解させることなのである。小説は読者に誤りをおかさないようにさせるべきものなのである。小説はこの任務を遂行してはじめて、芸術として完全なものになる、と Howells は言う。(p. 24) Howells の考えでは、この任務を遂行している小説家は Tolstoi と Björnson のみであった。

このように Howells は、*Fiction and Criticism* で説いたより以上に、“Novel-Writing and Novel-Reading” では、小説が「道徳的影響」を生

むべきものであるということを強調した。

IV

以上みてきたように、*Criticism and Fiction* では、リアリズムの主張の上にたった小説が「真実」を生むための必須の要件として、経験の「観察」と「解釈」をあげ、それらを通して描かれたものの中に「美」を規定しようとした。そして、小説の「道徳性」は「美」の生む効果でしかなかった。

ところが、“Novel-Writing and Novel-Reading”になると、小説に描かれるべき「真実」がなにであるかという点では、本質的な変化はみせていないが、小説の生む「道徳規範」を重視して、「道徳規範」を生んでいない小説は、リアリズム小説としては完全なものとはいえないという考えにかわっている。

「道徳性」に関してのこの変化は、Howells の Tolstoi への傾倒ぶりからも説明できるものである。Howells は Tolstoiこそ真に偉大な小説家であると考え、*Harper's Monthly* の1886年4月号の“Editor's Study”欄に『アンナ・カレーニナ』を取上げて以来、20篇以上の評論で Tolstoi を論じたほどであるが、彼の Tolstoi 評価の歴史にも道徳性が次第に大きな要素をしめてくるのがみられる。この変化は、*Fiction and Criticism* から“Novel-Writing and Novel-Reading”への、リアリズム論のなかでの「真実」と「美」と「道徳性」のかかわり具合の変化と軌を一にするものである。Howells は、すでに“Novel-Writing and Novel-Reading”の最後のところで、Tolstoiこそ真に偉大な小説家であるとのべているが、ここではさらに約10年後に書かれた一節を引用し、よりはっきりと変化した Howells の考えを示したい：

... even with his [Tolstoy's] devotion to reality in the study of life, which... was absolute, the prime affair was to captivate

the reader, to lead his fancy, not to convince and persuade his reason. A great gulf, never to be bridged, divides the ethical and the aesthetical intention, though,—

Beauty is truth, truth beauty,—

and though when the aesthetic intention presently becomes unconscious, and the creation of the truly beautiful may make for righteousness, still it is latent, still it serves two masters with the effect declared of old. But when once the call of Religion came to Tolstoy it came so powerfully, so loudly, that it must shut from his senses every voice that called before; there he stood; so help him God, he could no other than obey it, and it alone, testifying for it with all his heart and all his soul and all his mind. The moral spectacle is of unsurpassed sublimity. . . .⁹

注

- 1 W. D. Howells, *Criticism and Fiction*, eds. Marburg Kirk and Rudolf Kirk (New York: New York University Press, 1959), p. 14. 以下, *Criticism and Fiction* よりの引用はこの版により, 頁数を本文中に記す.
- 2 批評家としての Howells には, 主な7冊の批評論集と他の作家の小説, 詩, 劇にかいた40篇ほどの序文, および1200篇をこえる批評論がある. これらに要した語数は200万語ほどにもなる, と言われている. Cf. Edwin H. Cady (ed.), *W. D. Howells as Critic* (London: Routledge & Kegan Paul, 1973), p. 1.
- 3 彼の長篇小説の大半もこの20年間に書かれているし, 批評論の主なものもこの時期に書かれている. 7冊の批評論集の最初のもは1887年に出版された *Modern Italian Poets, Essays and Versions* であり, これには, *North American Review* の1866年10月号に発表した評論も含まれているが, 主として, 1870年代に *North American Review* と *Atlantic Monthly* に掲載されたイタリヤ作家論を集めたものである. 第2作の *Criticism and Fiction* は1891年に出版されたものであるが, *Harper's Monthly* に1886年1月号から1890年12月号までに掲載した“Editor's Study”を編集したものである. (この“Editor's Study”欄は, 1892年3月号までつづいたが, 最後の15回分ほどの批評論集にも取められていない.) 第3作は, *My Literary Passions* (1895) で, *Ladies' Home Journal* の1893年12月号から1895年3月号までに掲載したものである. 次の1896年に刊行された *Impressions and Experiences* は, 1882年5月から1895年10月までに, *Scribner's Magazine*, *Atlantic Monthly*, *Harper's Monthly*, *Century*, *Harper's Weekly*, および *Cosmopolitan* に発表し

たものを含んでいる。また、1900年に刊行された *Literary Friends and Acquaintance* は、*Harper's Monthly* の1894年5月号から1896年12月号までに発表したものに1900年9月と11月の2つの評論を加えたものである。*Heroines of Fiction* は1901年に出版されたが、これは同じ表題のもとに *Harper's Bazar* に1900年5月5日号から1902年1月号に連載したものに、一部新しい評論を加えたものである。1902年の *Literature and Life, Studies* は、1893年10月より1902年6月までに、*Atlantic Monthly*, *Harper's Monthly*, *Harper's Weekly*, *Literature*, および *North American Review* に発表したものを収録しているが、主として、1890年代後半の評論を集めている。*Imaginary Interviews* (1910) は、*Harper's Monthly* の“Editor's Easy Chair”から集められていて、1900年12月号から1910年5月号までのものを含んでいるが、文学を扱った評論は少ない。

以上からも明らかのように、Howells の批評論の主なものは、1880年代と90年代に集中している。

4. これは長らく未刊であったが、William M. Gibson により *Bulletin of the New York Public Library* の1958年号に収録された。その後、同年、The New York Public Library から、*Howells and James: A Double Billing* として刊行されている。以下、引用はこれにより、本文中にその頁数を記す。
5. この部分は1887年12月号に掲載された。
6. この部分は1889年11月号に掲載された。
7. 真実を求めるという理想をもった小説家として、イギリスでは Jane Austen, George Eliot, Anthony Trollope, Thomas Hardy, Mrs. Humphrey Ward, George Moore を、フランスでは Flaubert, Maupassant, Goncourts 兄弟, Daudet, Zola を、ロシアでは Tourguenief と Tolstoy, スペインでは Valdés, Galdós, Pardo-Bazan, ノールウェイでは Björnson, Lie, Kielland をあげている。これらのリスト中の小説家は、George Eliot の例のように *Criticism and Fiction* であげているのと多少のくいちがいがある。反対に、真実を求めない、不面目な小説家の名前のなかには、Thackeray, Dickens, Bulwer, Reade, Dumas, Feuillet, Ohnet, Valera それに Doystoyevsky がみられる。(p. 9)
8. 「知的刺戟」は読者のなかに必ずしも「道徳的行為」を生むわけでないから、「知的刺戟」と呼ぶ方が望ましい：

Fiction is the chief intellectual stimulus of our time, whether we like the fact or not, and taking it in the broad sense if not the deep sense, it is the chief intellectual influence. I should say moral influence, too; but it is often a moral stimulus without being a moral influence; it

reaches the mind, and stops short of the conduct. (p. 20)

- 9 W. D. Howells, "Lyof N. Tolstoy," *North American Review*, CLXXX-VIII (Dec., 1908), 847. (Howells は常に "Tolstoy" と綴った.)